

中尾彰一 蓼科の花束一

2018年6月25日(月)～7月13日(金)

当画廊では3年ぶりとなる中尾彰（なかお・しょう／1904～1994）の展覧会を開催します。島根県津和野町に生まれた中尾は、独立美術協会の第1回展（昭和六年）から60回展まで出品を重ねた画家であり、多くの文人と交流を持つ詩人・随筆家でもありました。戦時中には子供のための美術運動を立ち上げ、童画の分野でも長く活躍をしました。中尾は生涯純朴な精神をもち続けた貴重な芸術家でありましたが、残念ながらその存在は世代の交代とともに美術史の片隅に埋もれつつあります。このような画家の展示に励み、スポットライトをあて続けることは、私どもの重要な役割のひとつです。今回は油彩画約10点をご覧ください。

是非多くの方に中尾彰の、あたたかな絵の美しさに接して頂きたくご案内申し上げます。

【開催概要】

会期：2018年6月25日(月)～7月13日(金)

11：00～18：00（土曜、最終日は17：00まで）日・祝休み

会場：白銅鞆画廊（はくどうていがろう）

〒104-0031

東京都中央区京橋 1-1-10 西勘本店ビル3階

（JR 東京駅八重洲口から5分、東京メトロ銀座線京橋駅7番出口から3分）

【問い合わせ】

TEL 03-6262-1283

FAX 03-6262-1284

HP www.hakudohte.com

hakudohte@hkg.odn.ne.jp



「山の花」

油彩 6号 1960年頃

中尾彰プロフィール

- 1904年（明治37年）島根県津和野町に生まれる
- 1931年（昭和6年）独立美術協会第一回展入選。
以後第60回展まで出品と受賞を重ねる。
- 1933年（昭和8年）中野区江古田（現練馬区）にアトリエを建て定住する。
- 1935年（昭和10年）高見順、渋川驍、らにより創刊された文芸同人誌「日曆」の表紙絵を第7号から担当する。
- 1941年（昭和16年）斎藤長三、脇田和らと共に童心文化美術協会を創立。戦後には武井武雄、初山滋、大沢昌助らと日本童画会を結成するなど、子供のための美術を提唱し多くの童画を制作し実践する。
- 1953年（昭和28年）蓼科にアトリエを建て、一年の半分を過ごすようになる。蓼科風景が重要なモチーフとなる。
- 1955年（昭和30年）第4回小学館絵画賞（現小学館児童出版文化賞）を受賞。
- 1972年（昭和47年）里見勝三の呼びかけにより写実画壇の創立に参加する。
- 1979年（昭和54年）済生会熊本病院の壁画を制作する。
- 1982年（昭和57年）日本児童文芸家協会より児童文化功労者として表彰される
- 1993年（平成5年）諏訪中央病院の壁画を制作する。
- 1994年（平成6年）脳腫瘍のため熊本市の病院で没す。享年90歳。
- 2002年（平成14年）「～蓼科の花束～中尾彰展」が茅野市美術館にて開催
- 2009年（平成21年）「中尾彰一津和野・東京・蓼科一展」が練馬区立美術館、島根県立石見美術館、茅野市美術館で開催。

《収蔵》

島根県立美術館・茅野市美術館・練馬区立美術館・杜塾美術館(島根県) 豊島区(童画原画)



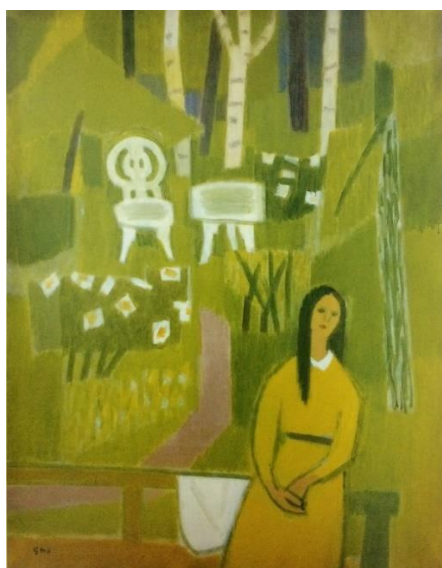
〈あじさい〉 油彩 F10号 1937年頃



〈新緑風景〉 油彩 10号 1950年頃



〈婦人像〉 油彩 SM 1931年



〈山荘の庭〉 油彩 148×114cm 1978年

白銅鞮画廊が中尾彰と出合って30年以上がたちます。作家としても、人としても、魅力的で大変な才能の持ち主でした。

展覧会を開けば、ファンが大勢お越しになりました。しかし、昨今は中尾彰を知る人も随分少なくなりました。

津和野に生まれた中尾彰は、十代を満州で過ごしました。絵は独学です。

二十代で「絵を描いて生きる」ことを夢見て展覧会への出品を重ねます。清く、透明な感性でとらえられた作品と、清潔な人柄が人の心をつかみ、一時期独立美術協会でも、写実画壇でも、中尾はスター的存在だったといえます。里見勝三は、協会展の折にはいつも自分の隣に中尾の絵を展示することを望んだと聞きます。

世俗への妥協や安易を排し、初心の純朴を長くもち続けた作品は多くの文学者にも愛されました。文学同人誌「日暦」の人たちと親しく、戦前からその表紙絵を描き、同人にもなり詩や随筆を残しました。

子供のための美術運動を興し、多くの童詩、童謡、童画に手を染め、特に坪田譲治は、著作の挿絵に長く中尾を指名していましたので、二人のコンビによる童話集や随筆集は60冊にもおよびます。

残念な事に、戦中と、また戦後にも火災によって多数の作品が失われ、そのことが画業の紹介の機会を少なくしたことの理由の一つとして挙げられます。

しかし、近頃には芥川賞作家、南木佳士さんの新刊「小屋を燃す」(文藝春秋社)の装幀に中尾の挿画が使われるなど、中尾彰の作品は、今も時代を超えた魅力を放ち続けています。

中尾彰の描く緑の野、緑の丘、緑の樹たちの、あのあたたかな、匂う絵の美しさを、是非ご覧頂きたく存じます。

白銅鞮画廊